

氏 名	尾 崎 元 昭
	お ぎ もと あき
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 726 号
学位授与の日付	昭 和 53 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	Amyloidosis in leprosy (らいにおけるアミロイド症)

(主査)
論文調査委員 教 授 濱 島 義 博 教 授 花 岡 正 男 教 授 西 占 貢

論 文 内 容 の 要 旨

<目的・方法>

らいに多いとされてきたアミロイド症の実態を調べ、らい患者にみられるさまざまな病変とアミロイド症との関係を明らかにするために、らい患者の剖検例について病理組織学的にアミロイド病の検索をおこなった。対象は国立らい療養所菊池恵楓園の1955～1959年の50例 (A群) と、同じく邑久光明園の1962～1971年の110例 (B群) である。アミロイドの検出にはコンゴ赤染色標本を偏光顕微鏡で観察する方法を用い、一部の症例では、チオフラビンS染色、アルシアン青染色も併用した。

<結果・考察>

A群の23例 (46%)、B群の17例 (15.4%) にアミロイドの沈着を認めた。アミロイド症は各年令層にみられ、70才以上の高令者への多発はみられなかった。アミロイド症の症例の平均死亡年令は、アミロイド症のなかった症例より有意に位かった。らい腫型への好発はみられず、らい菌に対する個体の免疫応答の差 (病型) とアミロイド症の発生は相関していないことが明らかになった。

そこで、アミロイド症の発生に関係するとされてきた結核症と悪性腫瘍について両群を比較したが、これらの合併症とアミロイド症は相関していなかった。一方、腎病変でもっとも頻度の高かった腎盂腎炎では、B群において有意の相関がみられた。らい反応に伴う腎の病変や腎盂腎炎などの炎症が腎のアミロイド症に関連していると推測した。

アミロイド症を臓器別にみると、両群を通じて腎と脾への沈着がもっとも多かった。間質に高度に沈着した例を除けば、アミロイドはおもに血管壁に系統的に沈着しており、循環性因子の存在を示唆している。

らいの化学療法以前の時代の報告に比べると、両群とも高い発生率をしめしている。このようなアミロイド発生の時期による変動には、化学療法、らい反応の増加、らい反応の治療に用いられる副腎皮質ホルモン剤その他の抗炎症剤、さまざまな合併症、老令化といった複雑な要素が関与していると考えら

れる。らい患者のアミロイド症は、これまで単純に続発性アミロイド症として分類されてきた。しかし、アミロイド症の発生には免疫機構が深く関与しており、原発性・続発性という従来の分類法にかわって、免疫学的発生機序に基づいて分類すべきである。らいのアミロイド症も免疫学的知見によって整理することを提唱した。

A群の腎アミロイド症の1例に異物型巨細胞を認めた。これらの巨細胞はアミロイドを貪食しており、人の腎アミロイド病にも吸収の機序がはたらくことを見出した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、化学療法時代以降の症例について検討した結果次のような興味ある所見を見出した。検索には国立療養所菊地恵風園の1955～59年に到る50例の剖検例と、光明園の1962～71年に及ぶ110例の剖検について臨床病理組織学的検討を行った。アミロイドの検出には偏光顕微鏡観察の他にこんにち為されているすべての組織化学的方法を以って行った。その結果、第一に、アミロイド症の沈着部位が血管壁を中心とする場であって、癩の病変とは直接関係の見出されなかったこと。第二には、化学療法の進歩に伴って癩病変の著しい軽快もしくは消滅が観察されたにも拘らず、逆にアミロイド沈着症の増加しているという事実を見出したこと。第三にこれらアミロイド沈着症の内80%に腎に病変を見出したこと。第四に普通のアミロイド症では余り認められない多核巨細胞が、沈着部周辺に観察され、これらが細胞質内にアミロイド様物質を貪食性単球系由来の細胞であることを見出した。

以上の論文は、化学療法に伴った癩の病理の新しい像を示したものとして、学術的貢献が甚だ大きい。よって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。